
その手につかむモノ

神無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その手につかむモノ

【Zコード】

Z2099M

【作者名】

神無

【あらすじ】

人が死ぬことは、彼にとって日常だった。

それは物心ついたころから、当たり前に見てきた光景だったから、そこになんの違和感も抱くことはない。

当然のように人の死を受け入れ、当然のようには人の命を奪った。

そんな風に育った少年は、今現在、なぜか学園生活を送っていた。

彼の知る日常とは違う、穏やかで、平和な日常。

とある目的の為、かりそめの日々を生きる、ひとりの暗殺者の物語。

01_暗殺者の夢（前書き）

この物語はフィクションです。

現実と似たような世界、似たような国や団体、似たような歴史や人物などが出来ますが、全て似ているだけで無関係です。

01_暗殺者の夢

人の命なんてものは、どうしようもないほど、あっせりと消えてしまう。

目の前で死んでいく人の姿を、少年は数えきれないほど見てきた。
「うつ、あ……」

そして今日もまた、人が死んでいく姿を見ている。

大柄で筋肉質な男が、苦しげに己の血だまりの中どうめき声をあげる様。

その首元は、鋭利な刃物で切られたようにパックリとあいていて、そこから今もドクドクと真っ赤な血が流れ続けている。

それは少しずつ、少しずつ命の灯火が消えていく過程だ。

「…………」

おそらく、あと一分さえもたないだろう。

なんてことを考えながら、少年はジッと男を見つめる。

不意に、瀕死の男の視線が、少年の方へと向く。

「あ、ぐつ……」

なにかを口にしようとして、だが結局はうめき声しか出でこない。ただ、それだけで少年は男がなにを伝えようとしているのか理解した。

そして、理解したうえで、小さく首を左右にふって、答える。

「無理だよ」

そう、言い放つ。

「あなたの娘は、殺される」

淡々とした口調のまま、続けた。

少年の言葉に、男は悔しげな表情を浮かべ、きつく、きつく目を閉じて、

「…………」

そのまま、その瞳が開くことはなかった。

あとに残るのは静寂。

むせ返るような血の匂いが充満した空間にたたずむ、不自然な静寂。

まるでそれは、時は止まつてしまつたかのような錯覚さえ覚える。けれど、それはまさに錯覚だ。

「ん？ なんだ、姿が見えねえと思ったら、こんなとこにいやがつたのか」

その証拠に、そんな言葉であつさりと静寂は打ち破られる。この場にそぐわない、のんびりとした口調。

少年は、無言のまま声のした方へと振り返る。

するとそこには、見慣れた中年男と、見慣れない少女の姿があった。

……もつとも、その少女の瞳は、すでに生命の輝きを失つてしまつてしているのだが。

ようするに、死んでいた。よく見れば、少女の左胸からなにかが生えていた。

それがナイフの柄の部分であると、少年はすぐに理解する。

刃は、少しも見えない。

それだけ深々と、ナイフが少女の胸に突き刺さっているのだ。おそらくは即死だつたのだろう。

中年の男は、少年から血だまりの上ですでに息絶えた男へと視線を移す。

それから大きく舌打ちをして、

「おいおい、もう死んじまつたのかよ。せつかく愛娘の死体を拝ませてやるうと思つたのによお」

なんてことを言つて、心底残念そうな顔をする。

……ああ、ほんとにクズだな。

言葉にすることではなく、心中で悪態をつくる。

おそらく、自分がクズであることぐらい、男だつて理解しているだろう。

だからわざわざ、口にする必要なんてない。

そんな言葉では、きっとこの男はなんとも感じないだらうから。
「さて、と。やることはやつたし、そろそろ行くか」

言つて、掘んでいた少女の死体を無造作に投げ捨てる。

「…………」

少年の瞳が、そんな少女の姿を映し出す。

けれど、それはほんの一瞬のことだ、すぐに興味がうせたよつて視線を外す。

いや、初めから興味などなかつたのだろう。

ならばどうして、一瞬とはいえ少女へと視線を向けたのか。

「…………」

その理由は、わからなかつた。

「ほり、行くぞ。ノロノロしてんじゃねえ」

ただひとつだけ、わかっていることがある。

部屋を出ていこうとする男の背を追いかけながら、思つ。

自分もまた、どうしようもないクズなのだらう。

01 — 暗殺者の夢（後書き）

はじめまして。

こういう投稿サイトは初めてで、色々といたらぬ点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。少しでも楽しんでもらえれば幸いです。

02_暗殺者の日常

「…………」

「そんな声とともに、『場隆哉の意識はやつへつと覚醒する。」

「…………」

寝ぼけ眼のまま、辺りを見回す。

その瞳に映る光景は、多くの喧騒が飛び交う朝休みの教室。なんてことない、日常と呼ばれる光景。

窓から吹き込む春の暖かな風が、隆哉の肌をやわしく述べる。ようやくハツキリしつつある意識が、また夢の中へと旅立ちたがっている。

そんな穏やかな空間を、どうこつけか彼は、ひどく歪んでいると感じた。

(いや、歪んでいるのは……俺か)

おかしいのは周りではなく、自分。

自分が歪んでくるから、この正常な空間につまく適応できなくなるだろう。

なんてことを思つ。

それから隆哉は、つこつと今まで見てこいた夢の「」を覚える。

(ん~つと、どんな夢だったのか)

だが、うまく思に出せない。

ずいぶんと懐かしい夢だった、といつとは覚えてこるが、それがどういう内容だったのかまでは思に出せない。

ひどく中途半端で、気持ちが悪い。

(でも、まあ……夢なんてそんなもんだし、仕方ないか)と、すぐ口に出すのをやめる。

思い出したところで、どうなるものでもない。

そもそも、懐かしいなんて感じた時点で、ろくな夢でない「」とは想像できる。

「『』場くん？」

名前を呼ばれ顔をあげると、ひとりの女子生徒が隆哉の席の前に立っていた。

肩より少し上で切りそろえられた髪に、少しつつ氣味の瞳。体格は小柄だが、どことなく活発な印象。

(こいつは、確か……)

と、目の前の女子生徒の名前を思い出す。「

「……水口、みなくち明美あけみ？」

「なんで疑問系？ それにどうしてフルネーム？」

「いや、特に深い意味はない」

「もしかして、一瞬ボクの名前が出てこになかったりしたのかな？」

「あー、うん。実はその通り」

と、あっせり認める隆哉に対し、水口は呆れたように大きくため息をつく。

「あのね、こうこうときめ、もう少し誤魔化すつていうのかな……とにかく、あっさりと認めちゃったダメだよ」

「いや、だってまあ、事実だしさ」

「事実でもダメなの。一瞬とはいって、同じクラスメイトの名前を忘れちゃうなんて失礼なことなんだからね」

「そう言われてもなあ」

「でも、下の名前まで覚えていてくれたのは、ちょっと嬉しかったかな」

と、言葉通り、本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「…………」

その笑顔が、隆哉には妙にまぶしく感じて、ほとんど反射的に目をそらしてしまう。

「どうして田をそらすの？」

「いや、特に深い意味はない」

「せつかも同じこと言つてたよね。それって『』場くんの口癖？」

「どうだろう、と考えてみる。」

言われてみると、よく使つてゐる言葉のよつたな氣もあるが。
まあ、そんなことはどうでもいい。

それよりも、だ。

「なんの用だ？」

「え？」

「だから、なにか用があつたから、話しかけてきたんじゃないのか
？」

「あー、そうだった、そうだった」

ポンと手を叩き、それから続ける。

「でもね、用があるのはボクじゃないんだ。用があるのは、あっち
の子」

と、促がすよつと廊下の方へと視線を向ける。

「？」

促がされるまま、隆哉も視線を水口と同じ方向へと向けると、そこ
からこっちはを見ている女子生徒と目が合つ。

するとその女子は、顔を赤くしてなぜか俯いてしまつ。

同じクラスの生徒では、ない。

水口のように、思い出すのに少し時間を必要とする場合があるも
の、隆哉は自分のクラスの生徒に関しては、顔と名前は全て記憶
している。

だが、その記憶の中に彼女の顔はない。

「あいつは誰だ？」

と、水口に訊いてみる。

すると水口は、なぜかそれには答えず、
「につしつしつしつ」

怪しき全開の氣味の悪い笑みを浮かべながら、

「ま、がんばれ、色男」

なんて言葉を残し、それからポンつと隆哉の肩を叩いて去つてい
く。

その後ろ姿を少しだけ眺め、あらためて廊下の方へと視線を向け

る。

すると、再び見知らぬ女子生徒を田代が合図。同時に、またまた女子生徒の顔が赤くなり俯いてしまう。その仕草だけで、隆哉には彼女の用件とやらが何なのか、おおよそ見当がついてしまう。

「やれやれ」

だから、もれるのは小さな嘆息。

「めんどうだ」

なんて咳きは、自身の耳にもハツキリとは届かないような小さな響き。

だけど、そう口にしながら、それでも隆哉は席を立ち、ゆっくりとした歩調で廊下へと足を進めた。

「好きです！　付き合つてくれださーい！」

シンプルかつ、テンプレ的な告白の言葉。

人気のない裏庭のすみで、隆哉は田代の前の見知らぬ女子生徒から突然の告白を受けていた。

もつとも、これが初めての経験、というわけではない。

(これで何人目だっけか)

そんな疑問が浮かぶあたり、一度や二度ではない。

だから、まあ……

「ごめん。気持ちは嬉しいけど、キミの想いには答えられない」

なんて心にもない台詞が、あっさりと出てしまう。

名前も知らない女子生徒の表情が、悲しげな色に染まる。

「そう、ですか」

田代につつすらと涙を浮かべて、

「すいません、でしたっ」

じらえ切れなかつたその涙を隠すようにして、走り去つていいく。

そんな姿を眺めながら、隆哉の口から漏れた言葉は、

「まったく、めんどうだ」

なんていう、ひどく冷めた感想だった。

隆哉には、彼女たちの心境というものが、まったくもって理解できない。

話したこともないような相手に、どうして好きなどと言えるのか。実に不可解だ。

それに、とも思う。

「なんで俺なんだよ」

正直なところ、もっとも不可解なのはこの部分だ。

話したこともないような相手に好意を抱くというのも、もちろんまったく理解できない。

だけど、それは自分が広く一般人と呼ばれる人種から逸脱しているからであつて、世間一般というやつでは、それが当たり前なのかもしれない、なんて無理やり思うこともできるわけだが……

どうして、自分なんかに好意を抱くのか。

この部分に関してだけは、どうしても理解できない。

自分の知らない世間一般というやつなのだろう、と理解しようとしてみても、やっぱり不可解なのだ。

「こんな俺の、どこに好きになる要素があるっていうんだ」

それは、けして卑下でもなければ皮肉でもない。

ただ純粋に浮かぶ疑問。

本当に、わからない。

理由がわかれれば、改善しようと思つ。

周りから好意を抱かれることのないよう、改善しようと思つている。

はたして、それを改善と呼ぶべきかどうかは微妙なところだが……

そこは置いておくとして、とにかく彼は困っていた。

表情にこそ出さないが、わりと切実とした悩みだったりする。

ここ最近、少しずつ噂が広がり始めている。

「場隆哉が、また告白されたらしい。でも、また断つたみたいだ。
これで十人斬りだ。

実際のところ、十人も告白してきたのかどうか、隆哉自身は覚えていない。

情報源も曖昧で、適當な憶測だけで広がっているという可能性も十分にある。

だが、そんなことはどうでもよかつた。

問題は、そんな噂が当の本人である隆哉の耳にまで入ってくるほどに、噂が広がり始めていることにある。

ここ最近、廊下を歩いていると妙な視線を向けられることがある。それは羨望だつたり、嫉妬だつたり、単なる好奇心だつたりと様々だが、とにかく多くの生徒から注目を受けている。

今のそういう状況は、隆哉にとつては本当に困る状況なのだ。

「ああ、どうするかなあ」

なんとかしなければいけない。

それがわかっている。

しかし、どうすればいいのかがわからない。
だからなにもできずにいる。

結果は、なにも変わらないといつこと。

「どうするかなあ」

再び同じ言葉を吐いて、教室に戻ろうとした、そのときだつた。不意に、誰かの視線を感じて、隆哉の目が僅かに細まる。

同時に、彼の周囲の空気が、春の穏やかな気候とは違う、冷たいモノへと変貌する。

「

ゆつくりと、視線だけで辺りを見回す。

だが、少なくとも今現在、隆哉の視界に映る範囲内に、視線の主の姿はない。

「ここには、もういない？」

自然と、そんな言葉が漏れる。

誰に向けた言葉なのか、彼自身にもわかつていない。

おそらくは自身への確認行為なのだろうが、それに意味があるとは思えない。

とにかく、彼は気配を探る。

ついさっきまで、自分を見ていた相手の気配を探る。

……そして、すぐにあきらめる。

先ほど呴いた言葉の通り、すでに視線の主は彼の感知できる範囲内にはいないようだ。

「もしくは、俺に気配を感じさせないほどの人間」

小さく、誰にも聞こえないような小声で呴く。

だとすると、彼が感じた視線というのも、故意に発せられたモノである可能性も出てくる。

もしそつなれば、それがなにを意味するのか。

「ようするに、挑発されたってことだよな」

そのことにに対する苛立ちは、特に感じたりはしない。けれど、

「売られた喧嘩は、買つてやるよ」

今度はさっきまでの小声から一転、周囲に聞こえる大きさで、あえて言葉を発する。

もちろん、まだ自分を見ているかもしれない相手に向けて、己の意思を伝えるためだ。

(……もしも、とつぐに遠くへ行つてしまつてゐるんだとしたら、今の俺はこの上ないマヌケな奴つてことになるんだりうな)

だが、まあ、そんなことはどうでもいい。

どうせ誰かに自慢できるような人生じゃないのだから。

どうだつて、いいのだ。

そんなことを思いながら、隆哉は今度こそ教室に戻るべく足をあげた。

その途中、下駄箱にて。

「あー、どうだつた？　どうだつた？」

と、その瞳に好奇心といつも光を宿した水口が現れる。

「……どうだつたつてなにが？」

「もう。誤魔化すなつての～」

このことの、と時で胸を何度もつかれる。

「もちろん、告白の返事のことだよ。果たして一人一人斬りなるか…

…これはもう、みんなが注目しているイベントと言つても過言じやないんだからね。

尊の元締めとしては、常に鮮度の高い情報を手に入れたいと思つわけよ」

「ほう、それはつまり、尊の発生源はお前だつたといつわけか

「あ……」

しまつた、と言わんばかりに口を手で隠す。

だが、そうしたところであれ彼女の言葉がなかつたことになるわけではない。

「あ、あはははは

違和感バリバリの渴いた笑みを浮かべる水口。

「…………」

対する隆哉は、冷え切つた視線を隠すことなく彼女へとぶつける。

「まあ、その、なんていうのかなあ。世の中、やっぱり刺激つてものが必要だつて、ボクは思うんだよね」

だから、ね……と、必死に言葉を続けようとしているのだが、続く言葉がなにも思い浮かばないらしいへ

「あははは」

結局は、再び違和感バリバリの渴いた笑みを浮かべるのであった。
なんか相手にするのも馬鹿らしこ。

「はあ」

そう思つた隆哉は、これ見よがしに大きなため息をついて、
「これ以上、変な噂を流すな」と、釘をさす。

今さらこいつが噂を止めたところで、広がってしまった噂が完全に鎮火するのは難しいだろうが。

「ラジャー！ 前向きに善処するのでありますわ」

それに対し、敬礼と共にそう返事をする水口。

……だが、それはようするに、これからも変な噂を流し続けるぜえつ！ と言つてはいるのと変わらないわけなのだが、

「ああ、善処してくれ」

やはり真面目に相手をするだけ無駄だと判断し、深く突つ込むことはなかつた。

「だけど、その様子だと今回も告白は断つたみたいだね？」

「ああ」

どうせ隠し通せるようなことでもないので、あつせうと認める隆哉。

「あの子、かわいいと思つんだけなあ～。『』場くんの好みとは違つたのかな？」

なんて訊かれて、彼女の顔を思い浮かべようとしてみて、つまく思い浮かばないことに気づく。

「さあ、どうだらうな」

だから、そんな曖昧な言葉でお茶をにじる。

少なくとも隆哉にとって、あの女子生徒はその程度の存在でしかないということだ。

記憶にとじめておく必要性も感じない、どうでもいい存在。

一度と関わることはないだろうから。

関わらないほうが、彼女のためだろうから。

「んな、暗殺者なんかと関わり合ひにならないほうが、

いいに決まつてこるから。

と、そこで昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

「うわっ、ヤツバ。早く戻んないと！」

と、慌てた様子で駆け出す水口。

そんな彼女とは対称的に、まったく慌てる様子もなく、むしろのんびりとした足取りで歩みだす隆哉。

「……そういえば」

と、空を見上げる。

澄み切った蒼のコントラストを眺めながら、

「昼飯、食つてないや」

ため息をつくように、そんな言葉を吐き出すのだった

03_暗殺者の帰宅

暗殺者。

言葉にすると、ひどく現実味のない響きだ。
けれど、それは存在する。

日常の闇に潜みながら、確かに存在する。

そんな彼らの中には、組織立て行動する者も少なくはない。

「山場隆哉もまた、そういう組織のひとつに所属する暗殺者であった。

下校途中、いつものコンビニで適当に弁当と飲み物を買い、そのまま寄り道をすることもなく帰宅。

彼の住んでいるのは、学校から歩いて15分ほどのある、新築のマンションだ。

ワンルームだが、オートロックにはじまり、オートバスに浴槽乾燥機などの最新設備が備わった、学生の一人暮らしにしては、えらく贅沢な造りになっている。

……だが、そういういた至れり尽くせりな最新設備は、どういうわけかまったく使われた気配がない。

ちなみに隆哉がこのマンションに住み始めて、約一ヶ月が経過している。

十一畳と、これまた学生の一人暮らしにしては広すぎる感のある部屋には、生活観というものがまったくといっていいほど感じられない。広々とした部屋は、ほとんど物が置かれてないものだから、さうに広々とした印象とされる。

そんな部屋のど真ん中には見るからに安っぽい敷布団が敷かれ、その少しづれた位置には昭和を連想させる年季のはいつたちやぶ台。

ちやぶ台の上には、ようやく現代社会の産物であるノートパソコンがひとつ。

ただし、なぜか起動したのはウインドウズ98。

「…………」

ほんやりと、起動中の液晶画面を眺めなら、隆哉はコンビニで買った弁当を食べ始める。

ひとくち食べたところで、「飯が冷えたままとこりこりに気づく。

そういえば、温めますか、と訊かれた覚えがない。思い出しても、レジにいた店員の名札には「研修中」なんて書かれていたような気も……。

「おいおい。いくら新人だからって、弁当の温めの確認ぐらいできるだろうが」

と、不満を口にするものの、それで弁当が温かくなるわけではない。

わざわざクレームを言つたために、コンビニまで行くのは面倒なので、仕方なく冷たい弁当をかっこむ。

……やべえ、レンジ欲しいかも。

基本的に物欲のない隆哉にしては、実に珍しいことである。

それから五分ほどで弁当を平らげ、すでに起動を終えて待機モードになつているノートパソコンを操作。

「さて、と」

今日こそマインスイーパーの上級をノーミスでクリアするぞ~、と意氣込んでいるわけでは当然なくて、单なるメールチェックである。

メールボックスを開くと、二件の着信があった。

とりあえず上から順に見ていく。

『件名・昨日ははじめよ、マイハイー』

・今日は早く帰るから、一緒に晩御飯を食べよう。チヨ（はーと）

ナニ

の永遠の王子・修次

「…………」

無言のまま、表情を変えることもなく、隆哉は送られてきた文章を三回ほど読み直し、そこからさらに五回ほど送り主を確認する。

送り主は、隆哉と同じ組織に所属する雨宮修次あまみやという男だ。

今年で四十年代もラストを迎える、組織の最年長でもある。

鋭い眼光とその身に纏う寡黙な空気が、熟年の渋さの秘訣と組織内では評判であつたりするのが……

『件名・昨日ははじめよ、マイハイー』

・今日は早く帰るから、一緒に晩御飯を食べよう。チヨ（はーと）

ナニ

の永遠の王子・修次

もう一度だけ、隆哉は送られてきたメールの文章に目を走らせる。

……寡黙な空氣？

……熟年の渋さ？

少なくとも、この文章を書いた者がそんな類の人物であるとは誰も想像できないだろう。

明らかに誤送だ。

雨宮には妻子がいる。さればおそらく、その妻に向けて送ったメールなのだろう。

そういえば、妻の名前は確か貴子たかこといったか……

隆哉と貴子。五十音順にアドレスを並べているのだとすれば、間違えてしまったのも納得がいく。

「…………」

間違つて送られてきたことを、雨宮に知らせねばだらうか？

なんてことを、隆哉は考える。

内容が内容だけに、非常に伝へにくい感はあるのだが、このままところのものじうかと思つ。

メールの内容を見る限り、彼は昨日、妻と喧嘩かなにかをしたようだ。

これはそれにに対する謝罪であり、つまりのままにしておくといふことは、その謝罪が彼の妻にまで届かないところとなる。それは気の毒だ。

ひとつそりと、隆哉から彼の妻へとメールを転送できればいいのだが、あいにくとアドレスを知らない。

だが、やはり直接は伝えにくい。

なんともいえない気まずさがある。

では、どうするべきか、と悩むこと約三十秒。

「よし」

名案が浮かぶ。

彼が導き出した選択、それは -

登録者全員に転送。

「ふう」

と、どこかやり遂げた達成感に浸る隆哉。

いわしておけば、きっと誰かが彼に知らせるだらう。

あとはそつちの問題といふことだ……

「さて、一件目のメールは、と」

隆哉は己の記憶から、つい先ほどまでの出来事を、メール共々まとめて抹消するのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2099m/>

その手につかむモノ

2010年10月28日06時32分発行